

楽しく地図の基本を身につけよう

島根大学教育学部附属中学校 岩田 靖

1. はじめに

学習指導要領の改訂によって、調べ方や学び方、見方や考え方を身につけさせることがますます重要になってきている。そうした中で、地理的分野の「3内容の取り扱い」(2)のアにおいて、「地理的な見方や考え方や地図の読図や作図、景観写真の読み取りなど地理的技能を身につけることができるよう系統性に留意して計画的に指導する」と明示された意味は大きいものと言えよう。さらに、解説書には、「地理的技能」について、「地理情報の活用に関する技能」と「地図の活用に関する技能」に分けて示されている。

地図の指導は、地理的分野にかぎらず繰り返し活用・指導していかなければならないことではあるが、中学校入学後に生徒たちがはじめて、地図と向き合っていく、大項目(1)の「世界と日本の地域構成」における、中項目「世界の地域構成」の取り扱いについて述べてみたいと思う。

2. 生徒の常識を覆す

生徒たちにとって地図は、小学校から慣れ親しんできたものであり、自分が見続けてきた地図に対して何の疑問を抱くこともなく、常識化してしまっているのである。こうした生徒たちを前にして、地図の常識を講義・説明してみても意味の薄いものになってしまう。

そこで、次のような質問(クイズ)をぶつけてみることにする。



OHPシートを細く切り、直角につないだ道具を取り出し、地球儀で生徒たちに確認させる。

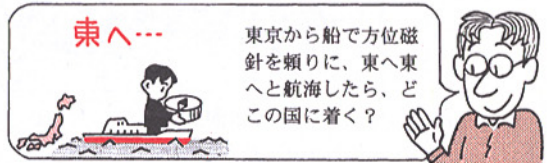
(チリかペルーあたりが正解)



先程の道具で確認(インドが正解)。南北も確認しておく。



自分の思っていた地図の常識が覆され、驚きと動揺を見せる生徒。ただ、自分が作業し、自分の目で確認しているだけに、その結果を疑うことができないでいる。そこで続いて、



大多数はチリと答える。先程の道具で、地球儀上を少しずつ移動させながら確認。(正解はアメリカ)



生徒の多くは直線ルートを描く。地球儀を使い、先程の道具で確認(大圏ルート)。



そして、「地球儀と地図ではどうしてこのような違いが生まれてくるのか」をそれぞれに考えさせ、意見発表を行う。また、地図(ミラー図法・メルカトル図法)の間違い探しをゲーム化して行っていく、最後にいろいろな地図を知らせるとともに、それぞれの図法の特徴と利用上の注意を見つけさせるのである。その際、日本中心の地図だけでなく、南半球を含めているような所を中心にした地図が描け、存在するということもふれておく必要があるだろう。

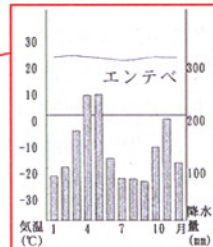
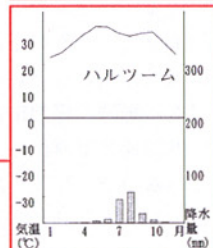
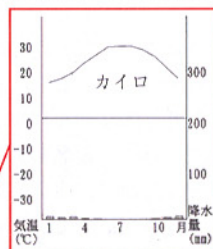
以上のように、地図のきまりや注意を教師の方から一方的に教えていくのではなく、クイズ形式を取りながら、作業・体験をまじえて、生徒自身に解き明かさせていくことが何よりたいせつではなからうか。そうした中で、生徒たち自らが、地球儀と地図との違いや地図を見るときに気をつけること、便利な利用法などをきちんとした理由づけをもって説明できるようにしていきたいと考えている。

3. 生徒に視点をもたせる

生徒たちにただ地図を見せ、気づくことを求めても何も疑問や気づきは生まれないのである。そこで、地図を扱うにあたって見つけさせたい視点といったものを何らかの方法でもたせていくことが重要になってくるものと考えている。

例えば、「エジプトはナイルの賜」という言葉を紹介し、次のような質問をすると

雨の降らないエジプト（カイロ）で、ナイル川が氾濫する（した）のはどうしてなのか？



生徒の答えは、

- ・地中海から海水が逆流した。
- ・集中豪雨が起った。

など、ナイル川の上流がわからない発言が、多くみられるのである。というのも、川が地図の上から下に流れるという意識が強く、高いところから低いところへ水は流れていくという常識が通用しないからである

(地図の高度表現が理解できていない)。こうした質問を通して、次のような視点を生徒たちに身につけさせていきたいと考える。

- ①地図（地勢）が、立体的にとらえることができる。
- ②地表面のさまざまな土地利用・植生を意識できる。
- ③緯度の高低による気候や生活の違いを意識できる。

したがって、この質問の後に、地球上の地表面のさまざまなようすを地図帳から見つけさせたり、地図にも行政図と地勢図があることとその利用方法を考えさせていくのである。また、詳しい気候帯等には立ち入らないことにするものの、緯度の違いによる気候や生活の違いを写真や雨温図などを通して具体的に紹介することができるのである。こうした緯度の学習とあわせて、経度（時差）の学習が続いて展開できるものと考えている。そして、緯度・経度の学習が、単に地球の番地的な数字の理解に終わらないように気をつけなければならないだろう。さらに、南半球での考え方や地球の自転・公転についても配慮していきたいものである。

4. 白地図作業を積極的に取り入れる

地図に親しみ、その基本を身につけさせるためには、ただ地図の知識を頭で学習するよりも、どれだけ地図（地図帳）や地球儀を利用していったかがたいせつになるのではなからうか。

中学校に入学し、これから地図（地図帳）との関わりをどのように築かしていくのか、その基礎を培うためにも「世界の地域構成」での取り扱いが重要になってくると言えよう。地図も含めて、いろいろなところから得た情報を白地図にまとめることを通して、その基本が身についていくものと考えている。課題（活動）例としては、いろいろなものと考えられよう。

- ・世界の天気や気温をまとめよう
- ・世界の動物や自然をまとめよう
- ・新聞やニュースから世界の情報をまとめよう
- ・世界の国々を仲間分けしよう
- ・自分で世界地図を描こう

5. おわりに

楽しく、地図の基本を身につけさせていくためには、中学校3年間を通して、系統的に指導を続けていくことがたいせつだということは、改めて述べるまでもないが、その際の視点として、今回述べた「生徒の常識を覆す」「生徒に視点をもたせる」「白地図作業を積極的に取り入れる」の三つを意識していくことが必要ではなからうか。

また、地図（地図帳）を常時活用していくようにすることと合わせて、重点的に地図利用や地図指導を行う単元や課題を設定していくことが大きな意味をもたらすものと考えている。重点単元としては、「日本の地域構成」や「身近な地域」などが考えられよう。さらには、いろいろな場面での総合的な地図の活用にも配慮していきたいものである。